

ロテスタント史においては「もうひとつの近代への系譜」と位置づけられている。その古プロテスタンティズムへの異議申し立ては、K・バルトラの危機（弁証法）神学やメソジスト運動など、今日もなおその影響を確認される。

無名とも言えるひとびとの現代日本におけるキリスト教的実践とドイツ敬虔主義に共通するものは何か。そこには、私的危機感の体験が生み出す共同体が姿を見せる。神学や教義ではない「危機の体験」は、信仰者と非信仰者とを区分しない。万人に共通する「悲しみ」は、教会共同体の外にいる他者をたんに宣教の対象とするのではなく、共同体を越境して形成される倫理の対象、すなわち「隣人」として理解することを可能とするのである。

キリスト教的「死生観」は「私」と「教会」をも越境して「共感的共同体」を拓く可能性をもっている。今後、脱構築的实践に潜む信仰論理の検討がいつそう必要とされるだろう。

ムカツラフ（能力者）概念をめぐる信仰告白表明と審判

四戸 潤弥

複数の宗教を死生観という側面から探るには、信徒、非信徒を問わず人間が主体となり、動態的に特定宗教との関係を問うことが一つの方法と考えることができる。唯一神教の系譜であるイスラームの場合、創造主、全能者である唯一神アッラーの慈悲に感謝し、最後の審判の裁きの日に、現世でのアッラーへの信仰と、その信仰が命じた義務と禁止に関わる教義の実践が問われ、天国、あるいは業火の運命の裁きを受けるとされる人

間が、結局のところアッラーの慈悲と許しに縋る他に術がない状況を伝える聖典『クルアーン』、かつ運命は生まれる時にすでに定まって（書かれて）いるとされる預言者のハディースを根拠とした教義において、先に述べた死生観の軸となる人間の主体性を見出すことは頗る難しい。ゆえに同じ唯一神教であるユダヤ教がユダヤの民の過酷な民族の運命の歴史的現実を契機として信徒の規律を重視する教義と実践と、またキリスト教が主イエスの十字架を通じて、神とのかかわりを主体的に意識する教義と実践との比較においてイスラームには信徒の主体的宗教への働きかけが、殊更、意識されないようにも見えるのは、アッラーにすべてを委ねる（タワククル）の概念が、主体性を喪失したような「アッラーに絶対服従」と表現されてきたことがその原因であるようにも思える。しかしながら、「信仰の甘美さ」を論じたハディースに出会う時、人はイスラーム信仰において、個としての人間の全能のアッラーに対する主体的働きかけをはつきりと見出すことができるのである。「信仰の甘美さ」とは簡単に言えば、本能に従い自由奔放に生きる人間にとって、その統御が必要とされる戒律を伴う信仰に生きるかを問いかけられた時。そこに拒否か、信仰かの二者択一の主体的選択があることが自覚され、拒否も可能だったにも関わらず信仰を選択した行為は、知性（アクル）の行為の選択であり、そしてその知性の働きは、日常の社会生活において行為の責任を問われる法的「能力者」であってはじめて行えるものであると言うことである。それはまた、イスラームという宗教の義務と禁止の戒律の実践の行為責任を最後の審判の日に問われることも

意味している。イスラームは日常行為と、宗教的実践行為を区別することなく、共にムカッラフ(能力者)概念に基づく行為責任者の信仰としてイスラーム信仰を位置付ける。一日五回の義務の礼拝において、「信仰告白(唯一神アッラー以外に神はなし、ムハンマドは神の使者である)」を九回唱え、この信仰告白を教義としては六信の第一項として、実践としては五行の第一項として位置付けるイスラーム信仰におけるムカッラフ(能力者)概念は、イスラームが拒否も可能であった選択肢の中から信仰を選択する知性の働きであり、本能を統御する信仰実践をムカッラフ(能力者)概念を基礎として自覚する。本能であれば習わずにすむことを、本能の統御を根拠とした故に、信仰を聖典『クルアーン』と預言者の言行『ハディース』を、アッラーの「導き(フダー)」を拠り所として実践し、現世の幸福と、来世における業火の懲罰を逃れることを目指すイスラーム信徒の姿が見えてくる。本能を抑えて、信仰を選択したムカッラフ(能力者)がその知性の働きを通じて日常生活と信仰生活とにおいてアッラーの導きを根拠に主体的に選び取った信仰実践の結果を、信仰実践を木に実る甘き果実であるとして、「信仰の甘美さ」と呼ぶのである。イスラームにおける死生観は、ムカッラフ概念を基礎として、生においては現世の幸福を、死においては来世での業火の懲罰を逃れることであり、そのための日常生活と信仰生活の実践が行われるのである。ムカッラフ概念はそうした意味からイスラーム信徒の主体的死生観を理解する契機であると言えるのではないだろうか。

〈下への超越〉と〈将来する浄土〉

——武内義範の「信楽の思惟」——

高田 信良

○「本願を信じ念仏を申さば仏に成る」(『歎異抄』第十二章) 仏教における死生観は「往生」を要として語られる。仏の国、浄土に往生(往き化生)して成仏するのが仏教徒の究極的関心事である。「生死いづる道」「浄土往生」を求めるなかで出遇われた〈念仏・信心〉(親鸞)は、仏教死生観を生きるひとつの在り方である。武内義範(一九一三—二〇〇二)が『教行信証の哲学』『親鸞と現代』にて思索する「信楽の思惟」を通して仏教における「死生観と超越」について考察する。

○「下への超越」「将来する浄土」との表現は『親鸞と現代』にて見いだされる。いずれも、〈ひねった表現〉であるが、武内の思索を特徴づけるものである。長谷正當は「武内義範の思想をその根本において方向づけ、導いている鍵概念を取り出すならば、トランス・デサンダンス(下への超越—人間の有限性の自覚のうちに降りてゆくこと、有限性の自覚とその超克の問題)がそれである」と指摘している。もうひとつ、「将来する浄土」「超越者との遭遇」が、武内の思索における鍵概念といえるだろう。そして、両者には、〈有限性の自覚のうちに降りてゆくことがその超克となっていく〉とのことがらの思索が「将来する浄土」の議論となるという仕方では不可分の連続性が見いだされるのである。

○「下への超越」(transcendental 逆超越論的)とは「自己自身が無限に自己の根底に深まっていくことにおいて、根源